



戦後会津における「観光史学」の軌跡

田中， 悟

(Citation)

国際協力論集, 17(1):51-78

(Issue Date)

2009-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001449>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001449>



戦后会津における「観光史学」の軌跡

田 中 悟*

はじめに

近代日本の曙となった、戊辰戦争を頂点とする一連の戦いにおいて、他の戦死者と同じく非業で不条理な戦死を遂げながら、ナショナルな祭祀からは排除された死者たちがいる。彼らと、彼らの周囲で生き残った人々とが経験した「犬死に」——この非業と不条理に満ちた死の経験は、その後どのように「克服」され、「解決」されていったのだろうか。

戊辰戦争において「賊軍」と名指された会津の人々は、近代のその当初から、避けようもなくこうした「犬死に」と向き合い、我がこととしてその問題に取り組んできた。その百数十年の軌跡は、近代における人間性の危機たる「犬死に」と近代人との関係性をめぐる問いを喚起するものであった。

上記の観点のもとにおいて、戊辰戦争から第二次世界大戦の敗戦に至るまでの期間の会津について、筆者は既に論じたことがある。¹ 本論が議論の対象とするのは、それらの検討を踏まえた上での第二次世界大戦後の会津である。1945年の敗戦に伴ってアイデンティティの再構築を迫られた戦后会津の人々の歩みは、どのような軌跡を描いたのか。それは、戦后会津アイデンティティの基調となった「観光史学」の内実を問うものであり、会津の現在を説明する試みでもある。

以下、戦后会津という枠組みの中で人々が向き合った死者との関わりに着目し、そこに生じた死者と生者との交わりの成り行きを追うことで、とかく単なる観光用の歴史と軽んじられることの多い「観光史学」がはらむ

* 神戸大学大学院国際協力研究科助教

問題性に光を当てていきたい。

戦後会津における「観光史学」の形成

1. 戦後会津の出发点——死者と近代の忘却

戦後日本における戦死者の忘却を論じた先行研究として、赤澤史朗の議論がある。² まずここで、その内容を確認しておきたい。

赤澤によれば、戦後日本においては、過去の戦争の認識や日本軍の行為の評価をめぐる大きな社会的・政治的争点が形成されたが、それとともにもう一つ、「軍事的なものの一般に正面から向き合おうとしない意識」を生み出し、「戦争犠牲者／戦死者の忘却」を生み出していったという問題が、敗戦によってもたらされたとされる。敗戦国として、国民共同の「英雄物語」を形成できなかった戦後日本では、戦争犠牲者や戦死者は丸ごと忘れ去られる傾向にあったのである。軍部・軍隊に対する反感は、軍部指導者にとどまらず、往々にして一般復員兵や戦没者遺族に対しても向けられ、軍人恩給の停止によって「死に損」との意識も広まっていく。この忘却傾向は高度経済成長後にさらに加速し、眼前にある「豊かな」生活とそれとは異質な戦争犠牲者・戦死者を積極的に結びつけて考えようとする意識が萎んでしまっているとされる。そのため、「慰霊」と追悼の問題は、戦後日本社会の中で常に「忘れられた犠牲者・死者」を想起する動きとして登場することになり、本来は記憶に止められるべき「忘れられた犠牲者・死者」とは誰なのかをめぐる対立として展開

されていく。

戦後すぐの社会において、先の大戦に至る近代戦争で戦死した人々は、生者にとって紛れもない親しい死者、言い換えれば「二人称の死者」であった。では、この二人称の死者を忘れ去った先には、どのような状況が待っているだろうか。

方向性としては二つ考えられる。あくまで死者不在の世界を維持しようとするか、あるいはやはり何らかの形で死者を想起しようとするか。前者の場合、それは世俗的近代社会の徹底と言えよう。誰も死を避けることはできないという厳然たる事実でありつつも、その事実と直面することをできる限り先延ばしし、世俗的世界にのみ関心を向けるという生き方。それは、ある意味で近代の典型であり、戦後日本社会の一側面は確かにこのように形成された。³ しかしその場合でも、死はやはり厳然たる事実として在るのであって、何らかの形で死者に向き合うことは避けられない。つまり、先に挙げた二つの方向性とは排他的なものではなく、同時に追求されるべきものである。そうである以上、戦後日本社会において、死者の世界が人々の関心事でなくなってしまうことはなかった。赤澤が言うように、「負けた戦争の死者」が忘れ去られたとしても、「ではどの死者を想起するのか」という問いが、すぐ後に続くことになるのである。

これから論じようとしている戦後会津も、言うまでもなく戦後日本社会の一部を構成するのであり、基本的にはこうした問題を同様に抱えている。そもそも、会津地方の中心で

ある若松市には、1908（明治41）年以来、1945（昭和20）年の敗戦に至るまで陸軍連隊が駐屯しており、名だたる激戦地へ多くの兵士がここから出征していった。したがって、戦後会津において「負けた戦争の死者」は間違いなく身近な問題である、はずであった。だが実際には、こうした死者は——まさしく赤澤の指摘どおりに——忘れ去られ、現在の会津若松においてもやはり彼らの影は薄い。そのことに対しては、会津という地域に焦点を合わせる限りにおいて、先の大戦では空襲などの戦争被害が具体的にはなかったため、戦後補償をめぐる対抗・対立関係が成立しなかったからだ、という解釈があるいは可能かも知れない。会津において、戦後補償とは、遺族会や旧軍関係者にとってのみ関心事だったのであって、例えば広島・長崎の原爆死没者慰霊のような動きは存在しなかったのである。

ただし問題はそれだけではない。近代戦争に対する認識や日本軍の行為に対する評価といった問題もまた、戦后会津では大きな争点となることなく、事実上放置されてきた。若松から送り出された部隊は、例えばノモンハン・南京・ガダルカナル・インパールといった、有名かつその評価をめぐる議論の盛んな数々の戦場を踏んでいながら、である。先の大戦をめぐる「忘れられた犠牲者・死者」とは誰なのかという認識と評価の対立軸が形成された戦後日本社会全般の状況と比較して、この点には戦後日本社会における会津の特殊性を見て取ることができよう。

では、戦后会津では、何が起きていたのか。

ここではさしあたり、次の点のみを指摘しておく。戦后会津において、戦災被害に関する議論の焦点となったのは、先の大戦の戦災被害——先も述べたように、会津におけるそれは軍関係者の戦傷病と戦死に局限されていた——ではなく、遠く幕末維新期に遡った戊辰戦争の戦災被害だったのである。

先の大戦における「会津」とは、何よりもまず、軍国主義の模範として積極的にその先棒を担ぎ、我が世の春を謳歌した、国家の精神的支柱とも見なしうる存在であった。いっぽう、第二次世界大戦後、その代わりに語られる戊辰戦争の戦災被害とは、二世代も三世代も前の遠い話であるだけに、もはや国家補償の議論の枠組には入ってこない。だが反面、かつて謳歌した軍国主義の全面的破産によって危機に瀕した会津人のアイデンティティという観点からすれば、戊辰戦争とは、近代日本の軍国主義に連累する被告ではなく、近代日本を告発する原告という地位を、会津人に与えてくれるものであった。

かくして、戦后会津の自己主張は、国家補償の枠外で、もっぱら戊辰戦争の戦災被害者として語り出され、現行の戦後日本政府ではなく、戊辰戦争から明治にかけての近代国民国家日本の藩閥政府を相手とした対抗関係が想定されたのである。

では、このような戦后会津独自の対抗関係は、いかにして形成されていったのだろうか。以下、具体的に考察してみたい。

2. 軍都から観光都市へ——敗戦から戊辰戦役90年祭まで

戦後会津史を顧みれば、戊辰戦争をめぐる語りがそこで重要であったことは論を俟たないが、必ずしも敗戦直後から一貫してそうだったわけではない。ここではまず、そうした敗戦直後の会津の雰囲気、郷土史学の動向を通して見ていきたい。手がかりとなるのは、戦前から続く郷土史家団体・会津史談会の活動である。

会津史談会は1945（昭和20年）4月に会誌第24号を発刊した後、いったん活動を中止していたが、1952（昭和27）年10月、復刊第一号となる『会津史談会誌』第25号を発刊し、活動を本格的に再開することとなった。もっとも、この第25号に載せられている事業報告によれば、1949（昭和24）年4月には戦後初の総会が持たれ、その翌月から早くも活動を開始していた。その活動内容はおおむね会津各所への実地見学および講演会の開催であった。

ここではそのうち、講演会について見ておこう。『会津史談会誌』第25号によってその題目を追うと、直ちに看取できるのは、野口英世関係を例外とすれば、それ以外のテーマはすべて近世以前のものだということである。こうした「前近代志向」は、一面では確かに戦前から会津史談会が関心を寄せてきたテーマの継続ではある。けれども戦前、戊辰戦争や明治維新期のトピックスを機関誌上でも盛んに採り上げていた会津史談会において、それは明らかな断絶の一面をもなす。⁴ そして

この「前近代志向」は、その後も会津史談会の基調となるのである。

会津郷土史学界がそのような雰囲気のもとにある中、1948（昭和23）年、松平恒雄参議院議長の肝いりによる第4回全日本観光連盟総会が若松市で開かれ、この総会をきっかけに、戦後会津若松の観光都市づくりは本格的なスタートを切ったとされる。⁵

その際、観光資源としてまず目の前にあったのは、磐梯朝日国立公園（1950年指定）内の裏磐梯と、東山温泉であった。これに、1955（昭和30）年の合併によって市域に加わった芦ノ牧温泉・背炙山・猪苗代湖、さらに只見川電源開発に湧いた奥会津なども加わり、今日の会津で観光資源としてイメージされる「自然」の顔ぶれが出揃う形となった。

戦后会津観光のもう一つの資源となったのが、他ならぬ「歴史」であった。この時期、会津観光の場における「歴史」とは、明治以降のいわゆる近代史ではなかった。それはつまるところ、会津の郷土史が提供するものであり、その戦后会津郷土史の潮流は、先に見たように、明らかな「前近代志向」に彩られていた。その自然な流れとして、1953（昭和28）年10月に举行された第1回会津まつりが、蒲生氏郷公360年祭と同時に開催されたのである。

「先祖に感謝する市全体の統一祭」というコンセプトで出発したこの会津まつりは第2回以降、戊辰戦争における会津藩降伏の日である9月22日（ただしこちらは新暦）から開催されるようになったが、そのことを除けば、

「盆踊り以外は、毎年メイン行事が変る催物」⁶に過ぎなかった。この流れが大きく変わったのは、1956（昭和31）年、前回選挙で再選を阻まれていた横山武（1906—1971）が市長に返り咲き、第2次横山市政のもとで翌1957（昭和32）年9月22日から24日にかけて——つまり、この年の会津まつりとして——挙行された戊辰戦役90年祭においてであった。

この頃の「会津まつり」のメイン行事が毎年変わっていたのである以上、この年の「会津まつり」が戊辰戦争一色に染まったのは、たまたまこの年が戊辰戦争から数えて90年というキリのいい年に当たっていたからに過ぎないと思われる。ところがこの祭典は結果的に、観光という観点から見てかつてない大成功を収めた。その模様は新聞においても、「繰込んだ人出も戦後最高で、近郷近在はもちろん全国各地の観光客で街はごつた返し、主催者はこの人出ざつと四十万とよんでいる」と報じられたという。⁷ この成功が以後、戦後会津郷土史界の動向とは切り離されたところで会津まつりの性格を規定し、ひいては会津観光の資源たる「歴史」の中身を固定化したのである。⁸

では、宮崎十三八が「バラエティに富んだ企画をし、過去を振りかえる記念祭ながら将来の一点を常に見つめていた面白い祭典でした」⁹と回顧したこの祭典は、どのような内容だったのであろうか。ここで確認をしておきたい。

祭典のプログラム¹⁰を見る限り、この戊辰戦役90年祭は確かに戊辰戦死者に対する年忌

祭であると同時に、「会津まつり」として市民祭の要素もふんだんに盛り込まれ、両者の性格の融合したたいへんユニークな祭典であったことがうかがわれる。この両者をつなぐのが、剣舞や獅子舞といった芸能であり、古賀政男の「白虎隊」¹¹をはじめとする音楽であり、あるいは少年白虎隊行進・会津藩出陣行列・提灯行列といった諸行事であった。

このような「バラエティに富んだ」祭典の企画は、横山武市長の発案・主導になるものが多かったという。それが戦後最高の人出を全国から集めたことから、白虎隊を中心とする戊辰戦争の歴史が観光資源として極めて有効であることが明らかとなった。そこでこの年以降、観光立市を標榜して観光を市政の最重要政策としていた¹²横山武市長の積極的関与のもと、市民祭としての会津まつりは観光資源としての観光祭へと大きく性格を変え、「白虎行列」が祭りの中心行事となった。つまり、1957年の戊辰戦役90年祭＝第5回会津まつりの成功を転機として、「これより会津の観光に鶴ヶ城と白虎隊の歴史が強く打ち出されるようになった」¹³のである。

また、1957年の祭典の中でいまひとつ注目されるのは、「鶴ヶ城天守閣復元期成同盟」の発会式が、会津若松市主催の記念式典と同じ会場（鶴ヶ城址武徳殿）で開催されていることである。会津観光のシンボルとして1965（昭和40）年に竣工した鶴ヶ城（会津若松城）天守閣の再建は、「戊辰100年祭」に向けてこの時から始まった。衆知の通り、竣工後、鶴ヶ城天守閣は、戊辰戦争の歴史と結びつけら

れ、白虎隊自刃の地・飯盛山と並んで、旧会津藩の歴史を引き継ぐと自認する会津若松市の観光の象徴となった。

かくして、戊辰戦争と白虎隊を前面に押し立てた、現在見るような「観光都市・会津若松」の基礎が固められた。その形成過程においては、横山武という〈名物市長〉の強烈的なイニシアティブによって戊辰戦争と白虎隊とが前面に押し立てられた第5回会津まつりの成功と、以後の会津まつりの観光祭化、そして鶴ヶ城天守閣の再建を抜きにして何かを語ることはできないのである。

3. 宮崎十三八の郷土史——イノセントな「時代散歩」としての「観光史学」

「郷土史家・宮崎十三八」の誕生

こうして戦後、戊辰戦争と白虎隊とを押し立てて観光都市化した会津若松は、その観光資源となった「歴史」の語り部を必要とした。そうした語り部の第一人者が宮崎十三八(1925—1996)である。

本節では、この宮崎十三八という人物に焦点を当て、戦后会津で盛んに語られた「歴史」——それは「観光史学」と自称され、また同じ言葉で揶揄もされた——のあり方について、考察を深めてみたい。

まず、宮崎の経歴を確認しておく。1993(平成5)年に出された「教育委員会表彰推せん調書」によれば、その経歴は次の通りである。

氏名 宮崎十三八 生年月日大正一四年七

月八日 満六八歳

経歴

福島県若松市融通寺町(現本町)に生れ、市立第四(城西)小学校・県立会津中学校を経て、旧制官立新潟高等学校文科卒業。県立安積高校教員の後、昭和二十六年若松市役所に奉職。三十三年間勤務。商工観光課長のとき、天守閣再建担当。社会教育課長、文化福祉センター初代所長、商工観光部長。五十九年三月定年退職。この頃から、会津史学会事務局長、平成元年から同会長、本年四月同顧問。この他現在、会津史談会相談役、会津弔霊義会評議員、県立博物館運営委員、同友の会副会長。¹⁴

この経歴の理解のために前提となる事実関係を確認しておこう。上記に挙がっている三つの郷土史関係団体のうち、会津弔霊義会は1913(大正2)年、戊辰戦死者の墓域の整備や維持管理、および祭祀の執行を主な活動内容として設立された財団法人¹⁵であり、会津史談会は1931(昭和6)年に発足した郷土史家団体である。これらに対して、会津史学会は、1964(昭和39)年から数年にわたって編まれた会津若松市史である『会津若松史』の執筆者を中心にして、1968(昭和43)年に発足した比較的新しい団体である。宮崎は『会津若松史』の執筆者の一人であり、会津史学会には創立当初から参加していた。いっぽう、戦前からの伝統を有する会津史談会へ宮崎が加入したのは、ずっと遅れて1976(昭和51)

年である。

ここから看取することができるのは、宮崎の郷土史家としてのキャリアは、市役所職員としてのキャリアに先行するものでは決していないということである。¹⁶『歴史春秋』第44号に掲載されている「宮崎十三八著述目録」を見ると、その執筆活動は、先に参照した『会津若松史』第7巻の第3章第12節「観光都市づくり」の分担執筆（1967年5月）に始まることがわかる。その後、1970年代から1980年代前半にかけての会津若松市役所勤務時代にも宮崎は、会津史学会の機関誌である『歴史春秋』や同じく会津史談会の『会津史談』などに継続的に記事を寄せている。しかし何と言ってもその執筆活動が本格化するのは、1984年の定年退職後であった。そこから死去までの12年間余りで、単著・編著合わせて十数冊の本が世に送り出され、旺盛な執筆・講演活動が展開されたのである。

こうした宮崎のキャリアを踏まえ、本論ではまず、宮崎十三八の市役所勤務時代から検討を開始することとしたい。

1951（昭和26）年、会津若松市役所に奉職した宮崎十三八がまず秘書として仕えることになったのは、前節でも登場した市長・横山武である。改めて横山の市長としての経歴を見ておけば、横山は1948（昭和23）年3月に若松市長に初当選、その後一度は落選したものの、1956（昭和31）年には再び市長に当選し、以後1968（昭和43）年まで連続3期、会津若松市長を務めた。結論から言えば、この横山との出会いが、宮崎の市役所におけるキャ

リアに決定的な影響を及ぼしたのである。

宮崎の回想に拠れば、会津若松城（鶴ヶ城）天守閣再建に着手するに当たって横山は、次のような指示を宮崎に与えたという。

この頃〔1962（昭和37）年頃——引用者注〕のことです。横山市長は私を商工観光担当の管理職にすると共に、「天守閣を建てるにはお城に詳しい者が必要だ、お前はお城の歴史を少し勉強してみないか。古いことだけでいいんだ。松永君にはお城の土木に詳しくなれと言っておいた」という旨の命令が出たのです。仕事の合間に歴史の本を読むなんてできるかなと思いました。……私が現在、定退後も観光的郷土史にのめりこんでいますが、この切掛けは横山市長の「お城に詳しくなれ」からでした。¹⁷

実にこの横山の指示こそが、「郷土史家・宮崎十三八」誕生の「切掛け」だったのである。上記の回想からもうかがえるように、それまでの宮崎は取り立てて歴史に興味のある人物ではなかった。¹⁸ 天守閣再建に際しての「理論武装」という目的のために、それまで大して関心を抱いていなかった歴史を勉強することを命じられた宮崎十三八は、この時期にようやく郷土史家としてのスタートを切ったのであった。1925年生まれで、後には自他ともに認める「会津郷土史研究の第一人者」となっていった宮崎であるが、その郷土史研究のキャリアは、実は戦後も一七年を過ぎて始まるのである。彼は郷土史家としては紛れ

もない〈戦後派〉であり、その学びは始めから会津若松市の観光行政と切っても切れない関わりを持っていった。

こうして遅咲きの郷土史家への道を歩み始めた宮崎の、駆け出しの頃の勉強ぶりは、会津史学会の機関誌である『歴史春秋』への寄稿記事で、ある程度うかがい知ることができる。第3号（1972年）の「出版こぼれ話・会津をめぐる作家たち——歴史小説『鶴ヶ城物語』編集ノートより——」に始まり、第4号（1973年）には「戸籍にみる戊辰の群像——資料として戸籍を読むすすめ——」が掲載され、さらに第7号（1976年）には「人物発掘《会津女性史考》彦姫の生涯——芦名氏と悲運をともにした女性」が宮崎の論文として掲載された。この《会津女性史考》というテーマは以後、一号飛んで第9号（1977年）から第13号（1981年）まで、足掛け6年にわたって連載が続けられている。

またこの間、『会津ふるさと散歩』（会津郷土史研究会編、歴史春秋社、1979）および『会津戦争のすべて』（会津史談会編、新人物往来社、1980）という2冊の本の共著者に名を連ねてもいた宮崎は、このうち前者を引き継ぎ、「歴史は散歩する」と題した郷土史随筆を1981年から俳誌『鷺草』に連載するようになる。直接的にはこれが、「郷土史家・宮崎十三八」の基礎を形成していくことになる。

「観光史学」とは何か

1984（昭和59）年、商工観光部長をもって会津若松市役所を定年退職した宮崎十三八は、

翌85年に初めての単著『私の城下町 会津若松』（国書刊行会）を出版した。これは、前述の俳誌『鷺草』その他に連載された歴史エッセイを収録したものであり、序文を網淵謙錠（1924—1996）が書き、帯の推薦文を司馬遼太郎（1923—1996）が書くという〈豪華さ〉であった。

以下、宮崎十三八とその「観光史学」を論じるに当たって、まずはその後の旺盛な執筆活動の原点であるこの本を検討してみたい。それは、宮崎が元来持っていた問題意識やそれを取り巻く環境が、ここに現れていると考えるからである。

手始めに、冒頭に掲げられた網淵謙錠の手になる序文「戊辰の〈痛み〉を超えて」を見てみよう。

昭和二十年（一九四五）八月の〈敗戦〉は、わが国の地方史研究に大きな飛躍をもたらした。明治以降、敗戦までの〈国史〉教育の主流をなしていた皇国史観的風潮が、その性格上、どうしても中央集権的な傾きをとりがちであったのにたいして、その束縛からの解放と、地方史のもつ特殊性への開眼とは、新たな視野を提供したからである。¹⁹

戦後地方史（郷土史）は、戦前の「皇国史観的」「中央集権的」な国史教育と対比され、それらからの「解放」と特殊性への「開眼」として位置づけられる。むろん、宮崎の筆が描き出す歴史は、この戦後地方史の一環とし

てまず位置づけられる。

もちろん、戦前の会津の歴史もまた、上記のような皇国史観的「国史」と一貫して一体化したものでは決してなかった。

…戊辰戦争において体制擁護派としての〈義〉に殉じた会津藩は、新政府からは〈逆〉の象徴と看做され、〈逆賊〉ないし〈朝敵〉という、いわれなき烙印を捺される立場に追い込まれた。その痛みが百年の尾を曳いた。会津の人々はその汚名を雪ぐべく、会津の歴史を書きつつけねばならなかった。つまり、戦前の会津の人々の郷土史は、自分たちが〈逆賊〉や〈朝敵〉といわれることへの抗議の歴史であり、雪冤の歴史であった。²⁰

確かに、ある時期までの第二次世界大戦前の会津郷土史については、綱淵の言うとおりであろう。だが、敗戦前の少なくとも十数年間、順逆史観で言う〈順〉の極致として、会津は「我が世の春」を謳歌していたのであった。

したがって、続くくだりに登場する「戸惑い」は、当時の「会津の人々」が実際に感じたものとは正反対の方向を向いている。それはむしろ、戦前・戦中の「会津の春」を歴史から消去することによって戦后会津が抱え込んだ〈つじつまの合わなさ〉に対する、当の綱淵自身の感慨だと考えたほうが適切かも知れない。

戦後、日本の歴史はそれまでの順逆の論拠を突然に失った。日本の歴史は、敗戦によって、もっと高次の視点への飛躍を要求されたのである。それはおそらく、会津の人々にとっても、ある種の戸惑いを与えたはずである。それまで自分たちが〈痛み〉に耐えつつ無実を訴えつつけてきた壁が、一夜にして取りはらわれたのであるから、その戸惑いは当然であった。²¹

この感慨は、何の違和感もなくこの序文を冒頭に掲げる宮崎自身、ひいてはこの本の読者たる、戦后会津郷土史に関心を有する人々が、この時点で共有していたものでもあろう。だが、念を押しておけば、「一夜にして取り払われた」のは「壁」というよりも、当時の会津人の、「雪冤」の成立根拠そのものであったのだ。

ところで、綱淵が言うところの「戸惑い」は、戦后会津の郷土史、そして宮崎十三八にどう受け継がれているというのだろうか。綱淵は書く。

しかし、その戸惑いから、三十九年の歳月が流れた。いまや会津史の研究は、新たな脱皮の時代を迎えている。しかも、百年にわたって会津人の〈痛み〉にこだわりつつけてきた先学たちの姿勢は、そのまま現在の会津の郷土史家たちにも受け継がれている。〈痛み〉にこだわることは、無機質な、人間不在の史観を拒否することであった。

(中略)

宮崎氏の書く会津には、この『私の城下町 会津若松』からも知られるように、もはや過去の〈痛み〉へのこだわりはない。むしろ、このこだわりを超えた〈安らぎ〉と〈悦び〉がある。それは新たな会津史学の発展段階であり、歴史の本質につながるものである。²²

ここで注目に値するのは、これまでの会津郷土史が〈痛み〉にこだわっていたのに対し、宮崎十三八はそうではないという、綱淵の認識である。²³

具体的に見てみよう。例えば、綱淵の「序文」に引き続いて掲げられている「序章 私の城下町」は、会津若松城下、郭内と呼ばれていた武家屋敷町の幕末ごろの古地図を題材に、当時の武家屋敷のありさまをしのんだ一文である。幕末の古地図であるから当然その追想は戊辰戦争にも及び、田中土佐や神保内蔵助・西郷頼母の家族21人といった人々の自決が語られるのだが、その最後は次のように結ばれている。

武家屋敷に戊辰戦争を結びつければ、どうしても暗くなるが、古地図による『時代劇散歩』はまた史上の人物の夢もあればロマンもある。私の住んでいる会津バス米代バスセンター裏——米代四之丁は、同志社大学を創立した山本覚馬、八重子兄妹、青森県の教育界の父となった沖津醇、斗南藩経営の夢を追い、遂に思案橋事件に連座し

た長岡久茂らが生まれたところで、トンボなどを追いながらこの路地で育ったことを思えば、時間と空間が限りなく広がってゆく。それが単に幕末だけでなく、遠く芦名、蒲生から上杉、加藤、保科と、鶴ヶ城をめぐる各時代の『時代劇散歩』を迫りかけてゆきたい。²⁴

このような「夢もあればロマンもある」、いわば「歴史散歩」といった叙述スタイルは、その後も宮崎十三八が文章を編むにあたって基本ともなるものであった。宮崎の著作の中核をなす四部作、すなわち『私の城下町 会津若松』(1985)・『会津地名・人名散歩』(1989)・『会津の史的な風景』(1993)・『手作り会津史』(1995)は、その主要部分が一貫した「歴史散歩」スタイルで書かれているところに共通点が見出せる。宮崎自身は、このスタイルについて次のように解説している。

…順序は別に考えず、思いつくまま手当たり次第である。内容も、一応は町名や場所の由来に触れるが、そこに関係のある人物が出現すると、その人物について話が展開していくというスタイルに、数回書いていくうちになってしまった。歴史に散歩させるのである。²⁵

会津の自然は限りなく美しく、また会津の歴史は限りなく深い。

わたしは、会津の住民の一人として、その自然と歴史に毎日触れている喜びを、ま

ず自分自身のために記し、それをできることなら、多くの人々に伝えて、知っていたかどうかと思って書いた。

しかし本書は会津史が中心なのであるが、それが限りなく美しく、深いのに、わたしの拙い筆ではほんの一部に触れただけで、語りつくせないのである。

それでもできるだけ会津の史蹟を歩き、その史実を調べ、そこに浮かび上がってくる人物に光をあててみつめてみた。また旅に出ても、会津史に関係ある土地を訪ね、会津人がそこで何をしたかを調べてみたつもりである。²⁶

あくまでもそれは「散歩」である。したがって、会津史という最大公約数的なくくりの中で、宮崎十三八の筆は時間と空間とを超越して自由に飛び回る。そこに宮崎が描き出そうとしたのは、一貫した歴史叙述などといったものではなく、「限りなく美しく、深い」会津の自然と歴史の全体、その美しさと深みであったと言えよう。それをできる限り多くの人々に伝えて知ってもらいたい。できれば実際に訪れて触れてみてもらいたい。それが、観光行政を担う行政人としてのキャリアを背負いつつ歴史を散歩する宮崎の究極的な望みであった。その語りが体現したのは、観光都市・会津若松の集客に貢献する「歴史」——観光客という他者の眼差しを常に意識して組み上げられる郷土の歴史——の学びであり、それがすなわち「観光史学」であった。²⁷ 綱淵が「もはや過去の〈痛み〉へのこだわりは

ない。むしろ、このこだわりを超えた〈安らぎ〉と〈悦び〉がある」と評した宮崎の叙述スタイルの真骨頂は、このような会津若松観光との関連において理解することができよう。会津若松を訪れる観光客を語る対象として想定したとき、過去の〈痛み〉へのこだわりではなく、こだわりを超えた〈安らぎ〉と〈悦び〉に関心が向くのは、〈戦後派〉の郷土史家たる宮崎にとって自然なことであった。

そこでは、戦前の会津人がこだわり続けたナショナルなものとの関係は、視野の中に入っていない。これは、宮崎の「観光史学」と戦前の「雪冤勤皇」との間のたいへん大きな差異である。宮崎のそれは、会津という郷土そのものにアイデンティティを見出そうとする、ネイション不在の世界観なのである。

さらに、宮崎のこの「観光史学」においては、登場人物は語りの時点ではむしろ死者なのであるが、宮崎の関心はその死ではなく、その死者が「生者であった頃」に向かう（先に引用した『私の城下町』の序章を参照されたい）。そのロマンティックな関心は、言わば「死者不在」の世界観を示していると言える。それは、戦後会津における「歴史の学び」の一面を特徴づけるとともに、戦後日本社会の世俗性に通じる側面でもあった。

かくして、観光都市・会津若松の「理論武装」としての「観光史学」には、ネイション不在・死者不在の、ロマンティックな「歴史散歩」としての側面を見出すことができる。宮崎十三八に焦点を当てた本節での考察の小括として、とりあえずこのようにまとめてお

くことにしよう。

けれども、「観光史学」はこれだけで完結しない。先に述べたように、死者の死はやはり厳然たる事実として在るのであって、何らかの形で死者の死に向き合うことは避けられない。そうである以上、戦后会津において、死者の死が人々の関心事でなくなってしまうことはなかった。たとえ「死者」が忘れ去られたとしても、「ではどの死者を想起するのか」という問いが、すぐ後に続くことになるのである。

以上の議論を引き継ぎつつ、次章では、「観光史学」と死者との関係に注目し、「観光史学」の総体としての把握を試みたい。

「観光史学」と死者

1. もう一つのイメージ——「怨念史観」としての「観光史学」

宮崎十三八の「観光史学」と言えば、実は先に論じた「歴史散歩」とは異なる、よく知られたもう一つのイメージがある。戊辰戦争の悲惨と悲劇とを強調し、その「怨念」を前提として、「官軍」とりわけ長州方の非を責める、「怨念史観」というイメージである。

その例として最もよく知られているのが、『新潮45』（1992年10月号）に掲載された「会津人の書く会津戦争」である。この文章は全国誌に掲載されたことで広く読まれ、その題名は翌年刊行された単著のタイトルにも採用された。

この文章には「ヒロシマのピカドンと同じ惨劇」という副題がついており、広島・長崎

の原爆体験を引き合いに出すことで会津の戊辰戦争体験を語るという形をとっている。

戦争の惨劇の被害がひどければひどいほど、加害者は忘れても被害者の心の傷あとは直らない。被害者がこの世から去っても、親の納得のゆかなかった被害は子に伝えられ、孫に伝えられてゆく。

広島や長崎の被爆体験は、戦後の日本の形成と日本人のメンタリティに大きな影響を与え、原爆慰霊碑の火は平和運動の願いとともに消えることはないであろう。²⁸

このように戦争被害の記憶の継承について語り、広島・長崎の原爆体験を意義づける宮崎は、ここから転じて戊辰戦争に飛ぶ。宮崎の父が祖父から聞いたという前置きで、戊辰戦争における若松城下の戦いの悲惨を物語る話をこれでもかと持ち出し、その上で次のように語る。

この日の地獄の展開は、一瞬にして十万余人の生命を奪った広島、長崎の原爆の惨劇に及ばなかっただろう。

犠牲者の数は少なかったにしても、恐怖感にぞっとなって立ちすくむ女兒の後から阿修羅の刃が襲ってくるのだから、銃弾に当たってぶっ倒れ、何時間後かには出血多量でこと切れた遺体は、秋の彼岸すぎから翌春の雪どけまで、ドブの中に顔を突っこんだままになっていたのだから、広島、長崎のピカドン地獄と、そんなにちがわなかった

と思う。²⁹

かくして、「一般住民を全く無差別に暴力でぶっ殺したのは、全く同じだった」と結論づける宮崎は、次のように嘆息してみせる。

「歴史は繰り返す」もののなのだから、この会津戊辰戦争の敗戦の悲劇を、日本人がもう少しよく知っていたならば、太平洋戦争はあのようなどん底まで落ちなくてもよかったかもしれないと、近頃つくづく思う。³⁰

網淵謙錠がかつて評した、過去の痛みへのこだわりを超え、安らぎと喜びの歴史散歩を綴る宮崎十三八からはおよそ想像もつかないような、過去の痛みへのこだわりぶりである。このような、宮崎十三八の「観光史学」が持つもう一つの側面を、どのように理解すればいいのだろうか。

もちろん、宮崎十三八自身も、戊辰戦争以来の過去の痛みが100年以上も変わらずそのまま残っているなどと主張しているわけではない。

しかし、「会津の維新の傷あと」とか、「うらみはまだ会津に生きている」と、書かれて評判になったこともあったが、傷あとは少し残っていて、まだ戦後が終わっていないとは思いうけれども、怨恨が残っているとは思えない。

まして現在の山口県（長州）や鹿児島県

（薩摩）や高知県（土佐）に対して、憎しと思う気持ちは、もう会津にはないと思う。³¹

どうしてそう言えるのか。宮崎はこう答える。

怨恨が残っていないというのは、会津では会津戦争の殉難者の慰霊祭祀や供養祭を実によくやってきたし、現在もよくやっているからである。それは「会津藩は決して間違ったことをやってきませんでした。あなたは正義を守って戦死されたのですから、あなたの戦死は決して無駄ではありませんでしたよ」と、呼びかける鎮魂祭でもあった。³²

つまり、会津は会津で戦死者への積極的な意味づけをきちんと行ってきたから、薩長土肥を恨む筋合いはもうないと言うのである。

しかし、そうであるならば、何故に、他ならぬ宮崎自身が、戊辰戦争の痛みと恨みとを書き連ねなければならないのか。何故に、宮崎が、薩長土肥、とりわけ長州に向けて、それをぶつけなければならないのか。その痛みは、宮崎十三八がもともと受け継いで持ち合わせていたものではなかったとすれば、いったい誰のものなのであろうか。

2. 萩市との姉妹都市提携問題という転機

この問題を解く鍵となるのが、1987（昭和62）年に起きた、萩と会津若松との姉妹都市

提携問題である。

宮崎によれば、この問題のそもそもの発端は次の通りである。

怨恨やわだかまりがまだ会津に残っていると思われているのは、萩市との姉妹都市提携を会津若松市では断ったからであろう。

これは昭和四十二年（一九六七）の百年祭の頃、山口市（長州側）の青年会議所から「すでに戦後百年の歳月が経過した、お互いに古い感情を洗い流して、姉妹都市になろうじゃないですか」という意味の提案があったのが最初であった。

それに対し当時の会津青年会議所は、熟慮して会議を続けた結果、「まだその時期ではありません」と断りの返信をした。このことが会津の新聞に出たとき、市民の反応は「当然のこと、それでいいんだ」と祖父が若い息子たちにうなずいているようであった。³³

この経緯について、もう少し詳しく見ておこう。この件が広く世に知られたのは、司馬遼太郎が『文藝春秋』1968（昭和43）年2月号に書いた「会津人の維新の傷あと」にある次のくだりがきっかけであった。

…去年だったか、旧長州藩・現山口県の県庁所在地である山口市の青年会議所から、
「すでに明治百年である。たがいにふるい感情をあらいながし、姉妹都市になろうではないか」

という意味の提案が会津若松市の青年会議所にもたらされた。それに対し会津の青年会議所はにべもなく拒絶した。その青年たちの小気味よさに町中の老人が喝采した。³⁴

しかし、この紹介にはどうやら司馬独自の解釈が混入しているらしい。この司馬の文章を受けて、宮崎は後に次のように書いている。

しかしこのように司馬さんに誉められた青年会議所や会津人は、ちょっと困った。正直なところ司馬調の「にべもなく」というほどしっかりしたものではなく、「まだその時期ではない」とあいまいな回答だったという当時の会員もいて、後味が必ずしもよかったわけではなかったらしい。³⁵

傍観者的で伝聞調の筆致からもうかがえるように、1967年当時、市役所職員であり、また郷土史家としては駆け出しであったはずの宮崎は、青年会議所間のやりとりで終始したこの問題の当事者ではなかった。さらに、この問題自体が、会津若松市側ではさほど尾を引くこともなく立ち消えていた。ところが、それから20年後、山口県側（萩市）からのアプローチによって再燃した問題は、かつてとは比較にならないくらいに侃々諤々の議論を会津若松市民の間にもたらした。

この一件を報じた『朝日新聞』1987年9月26日付記事「戊辰戦争の手打ち話、萩市の提案に会津若松そっぽ」に基づいて、まずはこ

の〈騒動〉の経緯を追いかけてみたい。

手打ち式は、萩市と同市観光協会、商工会議所の三者が三月、「会津に仲直りのアプローチをしよう」と決めたのが発端。仲介を頼まれたNHK 山口放送局も、実現すれば特別番組が作れそうだと間に立ち「世紀の仲直り」と題して、両市長の手打ち式をはじめ万人の交歓会や交換ホームステイなどを、放送衛星を使つての「NHK 特集」や「ひるのプレゼント」などを計画した。

このくだりに続くやり取りなどを見る限り、この時点では、萩市サイドだけでなく、当時の会津若松市長である猪俣良記自身も、これが大きな問題になるとは思っていなかった節がある。

ところが、この話題が報道されると、市民から反対論が続出し、市役所のほか地元夕刊紙やタウン誌にも投書が相次いだ。

「すべてに会津が上で、対等の手打ちなど片腹いたい」というものから「天皇より御褒詞（ほうし）の御宸翰（しんかん）をいただき『公』は我にあるにもかかわらず、朝敵・賊軍のレッテルをはられた」「会津藩士の死体は、埋葬することすら許されず、放置されていた」など、戊辰戦争へのおん念が噴出した。何しろ会津では、この戦争の慰霊祭が年に二〇回近くも行われている。

ここで興味深いのは、引用されている意見の多くが、戦前ではなく戦後に由来することをうかがわせる点である。長州と比較して「すべてに会津が上」という見解は、戦前にはまず見られない〈暴論〉であるが、これに近いことは戦後、例えば小説家の早乙女貢が、1971（昭和46）年から連載が始まった長編小説『会津士魂』などで繰り返述べている。³⁶

また「御宸翰」云々は司馬遼太郎「王城の護衛者」（この作品が『別冊文藝春秋』誌上に掲載されたのは1965年である）のラストシーンを飾って一躍有名になったエピソードであるし、会津藩士の死体埋葬については戊辰戦役90年祭の記念号であった『会津史談会誌』第33号（1957年）に掲載された町野主水「明治戊辰戦役殉難之霊奉祀ノ由来」によって、ようやく人口に膾炙したものである。したがって、それらの意見は、こうした源流を超えて遡ることもできなければ、戦后会津を一色に染めていたわけでもない。³⁷

さて、1967年当時は傍観者として振舞えた宮崎十三八は、今回は会津郷土史学界の〈顔〉として、矢面に立たざるを得ない立場にあった。その宮崎は、この問題についてどのようにコメントしたのだろうか。

仲良くすることはいいことだ、としながらの反対論もある。会津史学会事務局長の宮崎十三八さん（六二）は「好きだという感情ができてから結婚すべきです。今はそれが無い。むしろ『ライバル都市宣言』でもして、お互いを向上させるための話し合

いをした方がいいかもしれない」という時期尚早論だ。

会津サイドには怨恨や憎しみなどもはや残っていないという宮崎自身の認識からすれば、「仲良くすることはいいことだ」という立場に立つのが自然であろう。にもかかわらず、こうした時期尚早論を宮崎が唱えた理由はおそらく、先に見たような、現実には噴出した少なからぬ反対論だったと思われる。宮崎は、こうした反対論を無視し、自らの信念に基づいて突っ走るような理念先行型の人物ではなく、眼前の現実に適切な表現を与え、軽やかにさばいていくような、バランス感覚に秀でた書き手であった。ここで宮崎が述べて有名となった「ライバル都市宣言」などといったコピーは、申し入れ側たる萩市サイドとその受け手となった猪俣市長、そしてそうした動きに反対論をぶつ人々、それぞれの顔を立てるべくして編み出された、軽妙にして苦肉の表現だったのであろう。

実際、会津若松サイドの反対論は、極論に引っ張られる形でボルテージが上がる一方となっていた。下記の五十嵐大祐と宮崎十三八の両見解を、記者は「反対論」として一括りにしてしまっているが、その〈温度差〉は明らかである。

これらの反対論に対し、論理的に「間違っている」と否定できない現実があるのが賛成論の弱み。「福島県内で最大の城下町でありながら県庁は福島市にできた」「鉄道

敷設が遅かった」「高等専門学校もできなかったから、今も国立大学がない」。賊軍にされたがための悲哀は、今もなお、現実の生活に重くのしかかっている、との受け止め方が大方の市民感情を支配している。「名乗りをあげて賛成するのは、勇気がいる」雰囲気なのだ。

だから「いまさら一世紀以上前のおん念でもあるまい」としかいいようがなく、声も小さくなりがち。これに対しても、会津復古会の代表に当たる大肝煎（いり）の五十嵐大祐さん（六七）は「アラブ、イスラエルは二〇〇〇年前の恨み、つらみで戦っているのです」とあとに引かない。

けっきょくこの騒動は、市長選を挟み、事実上は宮崎の見解に沿った形で、とりあえずの決着がつけられた。

六月の市長選で猪俣氏を破って当選した早川広中市長は、八月に開かれた会津若松商工会議所との懇談会で、「行政レベルでやる前に、まず民間交流を進めた方がよい」と、市としては事実上、タナ上げする方針を明らかにした。

それは、交渉決裂ではなく、あくまで「タナ上げ」であり、結論の先送りであった。当時の情勢を丸く収めるには妥当な結論であったかも知れない。しかしこの一連の騒動は、かつてあった山口県との友好と交流とを忘却の彼方に追いやり、「長州への怨念」を声高

に叫ぶ場を提供し、「萩との友好問題に首を突っ込んだ市長は再選できない」という都市伝説まで生み出したという意味で、この後の会津若松における観光史学の方向性、さらには市の観光行政そのものにも少なからぬ影響を与えたのである。

早川市長にしろ、宮崎にしろ、そこにあるのは要するに、反対論の噴出する現状への追認でしかなかったのではないだろうか。そうした反対論に「歴史」と言えるほどの歴史があったかどうかは、先に見たようにきわめて疑わしい。ただ、経緯はどうあれ、萩との姉妹都市提携に賛成するには勇気の要る雰囲気、それがこの当時、宮崎らの目の前にあったのは確かであった。それはおそらく、眼前の現状を追認しゆく宮崎の当初の想像をも、超えたものであった。

3. 怨念探求の果てに——その後の宮崎十三八

この萩市との一件の直後に宮崎が書いた文章をたどってみると、戊辰戦争に関する比較的長い文章が集中的に編まれていることに気付く。まず、1988年の5月から7月にかけて『福島民報』紙上に「戊辰懷古」が連載された（のち『手作り会津史』に収録）。そして『別冊文藝春秋』184号（1988年夏）には「戊辰戦争百二十年目の会津藩」、さらに同186号（1989年冬）には「戊辰戦争百二十年目の会津藩Ⅱ」が掲載されている（ともに『会津人の書く戊辰戦争』に収録）。「歴史散歩」的な執筆活動自体はライフワークとして変わらず

続いているのだが、自由闊達な「歴史散歩」を身上とする宮崎において、同一テーマをめぐるこの集中的な執筆ぶりはやはり目立つ。

こうした事実から宮崎の心中を推し量れば、萩との友好問題をめぐる1987年の騒動を契機として、宮崎自身の歴史観に何らかの変化が生じたことを読み取れるのではないだろうか。

戊辰戦争の諸々の史実自体を、宮崎が知らなかったはずはない。にもかかわらず、そこに何らかの変化を読み込むとすれば、それは単純な史実の発見ではあり得ない。それはすなわち、120年も経過しながら萩市との友好問題を前に噴出した「怨念」を抱く、死者として[・]_・の「戊辰戦死者」の発見だったのではないか。

綱淵が形容したように、過去の痛みをこたわらず、自由闊達に綴ってきた宮崎の「歴史散歩」と、その手からは漏れていた「怨念」の息づきとが、そこでは対比される。では、宮崎がこのとき発見した「死者の怨念」とは何であったのか。

戊辰戦死者の非業や不条理は、近代会津において、時代が下るとともに生者たちから忘却され、歴史の彼方にフェードアウトしていた。そうした流れの上に立つ宮崎にとって、彼らはそれまで（観光資源としての）歴史における、自由な学びと語りの対象に過ぎなかった。その一方で第二次世界大戦後、早乙女貢に代表されるような言葉の紡ぎ手によって、長らく忘れられていた戊辰戦争の痛みと近代会津人の悲哀とは、「怨念」としての新たな語りを得ていた。両者をすり合わせて語り出

そうとすれば、それは明らかに齟齬を来たはずであった。だが、両者間の齟齬は、萩との一件において初めて宮崎に意識された。それまでの戦後会津では、宮崎十三八的な「歴史散歩」の語りと早乙女貢的な「怨念」の語りとが、観光資源としての価値如何という基準の下で特に区別されることなく、並存していたのである。

「歴史散歩」の、とりわけ初期における一連の叙述を読めば明かなように、宮崎にはもともと、「怨念」などの類はまったく念頭になかった。思えば、宮崎が会津史の勉強に着手し、いそしんでいた若き日々は、会津の郷土史研究が色濃い前近代志向に彩られ、司馬遼太郎や早乙女貢らの〈会津もの〉が世に出る直前であった。それは、1987年の騒動で噴出した戦後生まれの「怨念」が会津に根を下ろす前の、ある意味イノセントな時代だったのである。だからこそ、その噴出を目の当たりにした宮崎は、当惑し、それをなんとか理解しようとしたはずである。

してみれば、宮崎がこの時期、戊辰戦争の歴史を集中的に掘り返したのには、萩との一件で突きつけられた「怨念」の源流を探し求める、という意図があったのではないだろうか。戊辰戦争の歴史を見つめなおした一連の文章はその成果であり、それを通して宮崎は、120年の時間を貫いて息づく（かのような）「怨念」と、それを抱いたまま忘れ去られていた死者とを発見し、後にはその語り手として同調していったのである。宮崎十三八の「観光史学」における「歴史散歩」と「怨念

史観」という二面性の発端は、ここに見出せよう。

そこで見出された「怨念」は、間違いなく一旦は忘れ去られ、第二次世界大戦後になって改めて、新たに想起し直されたものであった。ただ、再発見した「怨念」を前にして宮崎が噛みしめたのは、会津の歴史を縷々書き連ねてきたはずの自分が、同時代の会津人の間に遍在するそうした「怨念」を取りこぼしてきたこと、そのことに対する忸怩たる驚きだったのではなかろうか。別の言い方をすれば、宮崎がこのとき直面したのは、解消されざるまま取りこぼされてきた死者たちの「怨念」を打ち捨てたまま、会津観光の振興にのみ関心を向け、観光客から向けられる眼差しという観点からして意味があることをのみ語り綴ってきた自らの〈非倫理〉への問いだったのではないだろうか。怨念を残した死者の眼差しをよそにして観光史学を語ってきた生き様は、死者とともに生きているはずの人間として、ふさわしいものだったのか。³⁸

では宮崎は、そのような「怨念」探求の果てに、何を見たのだろうか。

結論から書けば、その答えは明らかである。

…まだ現代においても解消していない問題が残っていると、会津人は考える。

それは、戊辰戦争の東軍、つまり奥羽越列藩同盟側の戦没者は、賊軍であると差別されて、まだ靖国神社に合祀されていないという問題である。³⁹

戦争の悲劇・敗者の苦難・戦死者への祭祀。これだけであれば歴史上ありふれた事例に過ぎない。にもかかわらず、会津が、会津のみが、〈120年もの〉の怨念を抱いているとすれば、それは今なお祭祀を求め続ける戊辰戦死者の、今なお解消されざる非業と不条理に行き着く。この段階に至って宮崎は、その具体的な表れを靖国神社に見たのである。⁴⁰

とすれば、近代会津を通じて継続されてきた鎮魂祭をめぐっては、その内容そのものではなく、そうした死者への呼びかけが第二次世界大戦後もなお必要とされるという点にこそ、目を向けなければならなかった。

確かに鎮魂祭は繰り返し行なわれてきた。だが、靖国神社への非合祀という現実、会津の祭祀への問いへと宮崎を誘う。いくら会津ローカルな祭祀が繰り返されても、やはり、どこか根本的な問題が解決していなかったのではないか。

怨念の源流を追い求め、会津史をたどり直した結果として宮崎が見出したのが、そのような「近代会津と靖国神社」という問題であった。言い換えれば、晩年の宮崎が突き当たった怨念の源流とは、「会津人とネイションとの関係如何」という問題にあったのである。

だがこれは、その指摘が宮崎自身にも「発見」として浮いて見えるほどに、戦後会津においては完全に忘れ去られていた問題でもあった。戦後会津の歴史観において、靖国神社という存在、靖国神社を通じた会津とネイションとの関係性という問題は、長らく視野の外にあったのである。

戦後、それまで盛んに語られた勤皇精神に基づく会津とネイションとの一心同体的な関係性はすっかり色褪せ、会津郷土史の場でネイションとの関係が語られること自体が稀となっていた。そこで戦後会津の人々は、アイデンティティの確立を、非ナショナルな「自然」と「歴史」とに託したのであった。すでに論じたごとく、宮崎十三八の「歴史散歩」的世界観は、観光という地域振興手段を通じて、死者不在・ネイション不在のまま、会津という郷土そのものにアイデンティティの根拠を見出そうとする戦後会津を象徴していた。敗戦後、国家との関係が大きく変化していた靖国神社を、会津との関係で語ることへの動機づけは、戦前以上になくなってしまっていたと言えよう。司馬遼太郎や早乙女貢（あるいはまた綱淵謙錠や中村彰彦）らの〈会津もの〉小説の世界とて、実はこうした怨念の源流の忘却という前提の上に、新たな怨念史観の源泉として成立していた、ということとどまる。実際、〈会津もの〉を書く小説家は、歴史小説という形式によって、会津とネイションという近代的な問題をスキップし、幕末維新时期と現代とを直接結びつけて、戦後会津の歴史観にふさわしいファンタジーを提供していた。靖国神社を通じたネイションとの関係を意識の外に置く、そのような戦後会津の産物であったという意味では、宮崎十三八の描くロマンティックな歴史散歩も、また例えば早乙女貢の描く敗者の怨念と美学も、実は表裏一体のものであった。

それでも、早乙女らの営みは一面、放置さ

れていた死者の非業と不条理とをすくい上げようとする点において、宮崎の「歴史散歩」にはない倫理性を帯びていたのである。実際、宮崎の「発見」のきっかけは、こうした〈会津もの〉小説の物語世界から紡ぎ出された戦後会津の言説に他ならなかった。

ともあれ、宮崎にとってここで最も問題となってくるのは、会津の戊辰戦死者を「祀るべき時に祀らずして今日にいたった」という、戦前・戦後にわたって二重に忘れられていた「後ろめたい＝非倫理的な」事実である。合祀することで戦死者にナショナルな意味づけを与えるものとして靖国神社が機能していた、第二次世界大戦までの時期でさえ、会津の戊辰戦死者の合祀はかなわず、彼ら非業の死者たちは忘却の彼方に遠のいてしまっていた。そして戦後、靖国神社が国家機関から宗教法人へと装いを新たにし、日本という国民国家が戦死者を生み出す戦争から遠ざかって数十年を過ごすなか、会津の靖国問題はやはり長らく忘却され、依然として解決されざるまま、解決の術を失ってしまっていたのである。

まあ、しかしこんな神社に祭られないほうが、白虎隊の純粋さが失われなくてよいのかもしれない。⁴¹

宮崎はこのように述べて、靖国神社の論議を打ち切ってしまう。だが、そうすることで失われないのは、白虎隊の純粋さというよりも、その非業さであり、死者に対する生者の後ろめたさ＝非倫理性であった。地元会津で

継続的に営まれる祭祀は、実際には靖国神社のナショナルな祭祀に対するオルタナティブとはなり得ないのであって、会津の戊辰戦死者は非業の解消を求めて立ち去ることはない。かといって、現在の靖国神社が彼らの合祀を受け入れることはなかった。仮に受け入れたとしても、一宗教法人となって国家の祭祀という性格を大きく失った靖国神社の合祀が、かつてと同じ意味を持ちうるかどうかは不明である。事実、戊辰戦死者の靖国神社への合祀を求める動きは、会津において極めて乏しい。⁴²

要するに、宮崎は、問題の所在は明らかにしながら、その打開策が見出せないという状況に追い込まれてしまったのである。これこそが、晩年の宮崎が抱えた深い苦悩だったのだ。自らが晩年を迎えつつあることを感じつつ、会津の郷土史家として長年親しく接してきた死者たちの怨念と自らの後ろめたさ＝非倫理性とを前にして、それらを解消する術を見出せぬまま無為に時を過ごす宮崎の焦燥は、いかばかりであっただろうか。

4. 宮崎十三八の「巡礼」が意味するもの

では現在、会津はどのような地点に到達しているのか。最後にこの点について考えることにするが、その前にまず、晩年の宮崎の思索の行く末を、「巡礼二部作」をもとに概観しておきたい。ここでいう宮崎の「巡礼二部作」とは、宮崎十三八の遺作となった『会津の古寺巡礼』（恒文社、1996）および『会津の観音巡礼』（同）のことである。死の床に

ついていた宮崎が最後の気力を振り絞るよう
にして遺したこの二部作には、どのような思
いが込められていたのだろうか。

「会津の自然は限りなく美しく、また会
津の歴史は限りなく深い」といわれている。

会津を訪ねる観光客の多くは、裏磐梯や
猪苗代湖を探勝し、また鶴ヶ城や飯盛山の
白虎隊の史蹟などをまわって、遠い武士の
世を偲び、あとは温泉に泊まる。

しかし、これだけではまだ会津観光の初
歩にすぎない。会津のよさを本当に知るに
は、会津の古寺を巡礼することが一番だと
お勧めしたい。もちろん古寺、名刹が多い
のは京都、奈良であるが、それに次ぐ佛の
里が会津なのである。

佛都会津の存在は、歴史の中に求めるこ
とができるし、佛都会津を確認するにふさ
わしい寺跡やロマンを秘めた佛像が会津の
各地に残っている。まさに佛の里なのであ
る。⁴³

前半に挙げられているのは、第二次世界大
戦後、観光都市化に邁進した会津若松の、定
番観光コースそのものである。観光行政を担
う会津若松市職員として、また会津郷土史学
の中心人物として、宮崎自身の費やした半生
がそこに込められていると言っても過言では
ない。にもかかわらず、それだけではまだ
「会津観光の初歩」に過ぎないというのであ
る。それは、宮崎にとって人生の自己否定の
言葉である反面、過去のファンタジーを乗り

越えて新たな一步を踏み出したしるしとして
読むことも可能である。

晩年に至って宮崎が着目し、丁寧に掘り返
していったのは、観光ブームの陰で、会津に
密やかに息づいていた仏教文化であった。
「巡礼二部作」はそれぞれ連載原稿を基にし
ているが、それらの連載時期を時系列に沿っ
て並べてみると、「会津三十三観音詣り」（東
邦銀行『くらしの中の銀行メモ』1980年8月—
1982年2月）・「奥会津三十三観音詣り」
（同、1989年9月—1992年6月）・「会津の
寺寺」（在家佛教協会『在家佛教』1994年2
月～1995年7月）となっている。最初の「会
津三十三観音詣り」はやや時期が早いですが、残
る2つの連載はかの萩との友好問題に会津若
松が揺れた1987年以降のものである。「怨念
史観」に直面し、苦悩していた宮崎は、まさ
にその時期、会津に点在する観音堂や古寺を
一つ一つ回っては文章にするという作業を重
ねていたのである。そのような、会津の仏教
文化に沈潜していくかのごとき文章を、遺言
であるかのように遺していった宮崎は、その
とき何を思っていたのだろうか。

宮崎の死後の出版となった『会津の観音巡
礼』の「あとがき」に、夫人の宮崎よし子が
次のような文を綴っている。

今、思いますに、宮崎自身がこんなに
も会津のお寺のこと、三十三観音のことにこ
だわったのは、近く自分が御仏の元に旅立
つことを感じていたせいかと、納得いたし
ております。今頃は、司馬遼太郎先生、綱

淵謙錠さんといっしょに、楽しそうに、談笑しながら、観音様詣りをしていることでしょう。⁴⁴

この推測は、差し当たっては妥当なものであろう。ただ、これまで見てきた宮崎の苦悩に思いを致すとき、己の死にとどまらぬ思索の広がりや宮崎の中にあったと見ることは、的外れではあるまい。非業を解消できぬままにまだ祭祀を求め続ける戊辰戦死者のことを、古寺を巡る宮崎が思わなかったはずはないからである。⁴⁵ ナショナルな慰霊祭祀からは排除され、120年以上もの間、地元会津における祭祀を受けながら、今なお解けぬ怨念を抱える非業の死者たち。彼らと向き合っていた宮崎は、その非業の引き受けを、会津が豊かに育んできた仏教に託そうとしていたのではない。近代の悲劇と慰霊祭祀とを包み込む、より高次の死者への慰霊として、宮崎は会津の寺々を巡礼していたのではないだろうか。それは逆から言えば、戦後、会津の人々が築きあげてきた観光都市・会津若松のあり方とそれを支えてきた観光史学、さらには近代会津の慰霊祭祀にも、宮崎が見切りをつけたということでもある。ナショナルな祭祀にも、ローカルな祭祀にも頼ることができないことに思い至った宮崎は、それらとは違う、安らぎと喜びとを死者と生者にもたらす倫理的な営みを、会津の寺々への巡礼の中に見出そうとしていたのではないだろうか。

つまり、宮崎がこれら二部作の刊行に執念を燃やしたのは、こうした古寺を新たな観光

資源として開発しようとしたからではなく、非業に苦しむ死者と死者への後ろめたさに悩む生者への鎮めと慰めを願いつつ、静かに巡礼するための導きとして、これらを位置づけようとしていたからであると見ることができるのだ。そうした巡礼において、非業の死者たちを見つめる宮崎の眼差しは、単なる歴史上の登場人物——共同性を有しない三人称の他者——ではなく、一人称複数をともに構成する他者＝二人称の他者を眼差すものとなっている。晩年の宮崎にとって非業の死者たちは、奇しくも同年に相次いで逝った司馬遼太郎や網淵謙錠ら親しい友人と同じく、二人称の他者であった。彼らの死を自らの死と同じ境地に重ね合わせることで、宮崎は彼らと一人称をともしたのである。

戦後、従来の国家の祭祀をめぐる状況の変化をよそにして、会津人によって忘却の淵から呼び戻された戊辰戦死者も確かにいた。けれどもそれは、戦時中に軍国主義を高唱するため白虎隊などが動員されたのと同様の、死者不在の「観光史学」に基づく動員であり、死者の非業と生者の非倫理とに対して生者の関心が向けられることはなかった。それらはただ、そのままに放置されていたのである。⁴⁶ そうした後ろめたい現実が遅ればせながら目を向け、死者たちとの一人称複数の共同性を築こうとしていたのが、古寺を巡る晩年の宮崎の姿だったのではないだろうか。

むすびにかえて——会津観光の新展開と会津の現地点

では、上に述べた晩年の宮崎の試みは、成功したのだろうか。別の表現を用いれば、会津の地において、それは受容され、継承されたのだろうか。

21世紀に突入した会津観光の現況をそうした観点から検討すべく、会津若松で出版された大判の会津ガイドブック『改訂新版 会津』（歴史春秋社、2004）を、その14年前に出されている改訂旧版の『会津』（歴史春秋社、1990）との比較において参照してみよう。

『改訂新版 会津』の巻頭を飾るグラビアの題は「古寺巡礼」であり、続いて掲げられたエッセイの題名は、かつて宮崎が書いたのと同じ「仏都会津」である。改訂旧版には見当たらないこの特集では、現代会津のアイデンティティを規定する重要な要素として、6世紀にまで遡るとされる会津の仏教文化が位置づけられている。歴史的に育まれたそのような仏教文化から語り起こされる現代会津観光は、ここでは「原始古代以来」の自然と歴史との奥行きをもって表現されていく。幕末維新期の諸々は、その中の一コマとしての位置づけをのみ与えられる。「会津の殿様」の系譜のフィナーレを飾るものとして、戊辰戦争を偲ぶ「会津秋祭り」の歴代藩公行列の中に、あるいは数多い史蹟・墓碑の中に、ようやくそれらを見ることができる。もはやそこでは、鶴ヶ城も飯盛山も、あるいは会津若松市そのものも、会津観光の全体構成において縦糸となる会津史の、ほんの一局を象徴す

るものとして数えられるに過ぎない存在となっている。それに対してクローズアップされるのは、郷土の食と酒であったり、民芸の伝統と美であったり、山水に親しみ楽しむ野遊びであったりする。会津のこうした側面については、改訂旧版においてもすでに中心的トピックスとなっているのだが、新旧両版を見比べて明らかなのは、地域の中心としての会津若松、歴史の中心としての戊辰戦争の重みがはっきりと低下していることである。新版の「エリアガイド in 会津」でも筆頭に挙げられている会津若松であるが、旧版では同様の「会津路を行く」という項目とは別に「城下町会津若松探訪」が独立して立てられている。また、旧版の目次には大項目として立てられていた「戊辰戦争と白虎隊」あるいは「飯盛山」といったトピックスは、新版では目次から完全に姿を消してしまっているのである。

こうした言わば「ポスト宮崎十三八」時代の会津観光のあり方には、宮崎が育んだ観光史学の継承と放棄との両面が見える。すなわち、「限りなく美しい」会津の自然と、「限りなく深い」会津の歴史とを前面に押し立てた『改訂新版 会津』は、宮崎十三八の「歴史散歩」にいま一度回帰し、それを継承・深化させたという側面を見せている。さらに、すでに論じたごとく、従来、戊辰戦争（鶴ヶ城）と白虎隊（飯盛山）とを軸に戦后会津観光は盛り上げが図られてきたが、その観光行政の中心にいた宮崎は、そのあり方に痛切な反省を抱いてもいた。⁴⁷ 古寺巡礼を通じて戦后会津観光の枠組を破り、旧会津藩以外の歴史や

若松以外の会津地方へと観光の目を広く向ける先鞭をつけたのも、また宮崎であった。人々への訴求力を失いつつあった会津観光の進化形として、『改訂新版 会津』に見出されるようなブレイクスルーは、その点に関する限りとりあえずは宮崎の遺産を相続したものと見なしうるだろう。

しかし他方、晩年の宮崎が追い求めたことのもう一つ、戊辰戦死者の非業と生者の非倫理とへ思いを寄せ、そこに一人称複数の共同体を築こうとした試みは、受け継がれることなく捨て置かれてしまっていると言っても過言ではない。戊辰戦死者の死は、例えばテレビドラマとして消費される——仮に視聴者が涙を流したとしてもその場限りで、番組が終わってしまえば何事もなかったかのように忘れてしまう——ことはあっても、そこに、彼らの非業を通して、死者と生者とが互いに寄り添う一人称複数の共同体が形成されているようには見えない。死者はまたも忘却され、そこには死者不在の観光共同体が広がるのみである。

思えば、1928（昭和3）年の皇弟・秩父宮雍仁と松平節子（勢津子）との結婚のときですら、戊辰戦争の記憶は60年も昔の話であった。1878（明治11）年生まれの松平保男は当時、「（旧藩時代の）老人達にしましても、明治戊辰の会津藩の立場と今日このめでたき昭和戊辰の奇しきめぐりあはせを述懐しながら私等と同じやうな気持で歓喜にむせぶことでせう」⁴⁸と述べ、松平子爵家の当主である自らにとってすら「明治戊辰」がもはや他人事

であることを問わず語りに語っている。現代の会津人にとって、「明治戊辰」はその倍以上の年月の彼方に霞む昔話である。現代において、会津人であるというだけで、戊辰戦死者と一人称複数の共同体を築けるとすれば、それは尋常なことではない。それを可能性として意識すること自体、郷土史に親しく接し、彼らの非業に思いを致しつつ自らの晩年に思いを馳せた、宮崎十三八という人物にしてはじめて可能な、常人ならざる技であったと言えるのかも知れない。

宮崎十三八が奇跡的に親しく引き寄せた戊辰戦死者はこうして現在、改めて歴史の彼方に遠ざかっていったのである。1868（慶應4／明治元）年以来三度巡ってきた第二の「昭和戊辰」ですら1988（昭和63）年のことであり、すでに一昔前のこととなっている。のみならず、靖国神社に祀られる近代戦死者の死からもまた、60年以上もの年月をすでに経てしまっている。第一の「昭和戊辰」において「明治戊辰」を眺めるように、現代日本を生きる人々は1945年を眺めているのである。もし仮に、同じだけの長さの年月が、同じ距離感を生者と死者との間にもたらすとすれば、近代戦争で戦死した者たちの非業すら、現在はもはや「老人達」の昔話に過ぎなくなってしまっている。

かくして、21世紀に突入した現在の会津において、生者と親しい交わりを結びうるのは、もはや戦死者ならざる〈戦後の死者〉ばかりとなりつつある。会津方が「賊軍」と名指された戊辰戦争も、「日本精神模範の地」とし

て陸軍部隊を送り出し続けた一五年戦争も、今や遠い昔の他人事に過ぎなくなったとすれば、会津の人々にとって、それらの戦争によって生み出された死者たちの非業と生者の非倫理とに彩られた「会津」にこだわり、「会津人」であり続けようとする動機づけはすでに薄弱である。あるいはそれは、近代において戦死者で縁取られた「会津」なる枠組みに沿ってアイデンティティを見出そうとする試みそれ自体の意義が問われる時代の到来とも表現できよう。

だがこれは、問題の〈解決〉ではない。それは、非業と不条理に基づく死者の「怨念」を前にして、生者が引き受けるべき〈後ろめたさ〉がただ忘れられているという、構造的に非倫理的な時代の到来を意味するに過ぎないのである。

この問題は明らかに、会津という一地方にはとどまらない。会津に見出されたこの「忘却の非倫理」は、現代日本社会が到達した境地そのものでもある。この事態がもし放置されるのであれば、それは「非業の死者の忘却」というにとどまらず、二人称たり得る死者の範囲の狭まりを意味する。言うなれば、一人称の共同体を三人称の他者へ、とりわけ三人称の死者へと開く試みとは正反対の、他者に対してより閉じる方向への動きが、そこに現出するのである。

注

- 1 詳細は拙稿「近代会津アイデンティティの系譜」(『国際協力論集』第14巻第2号、2006)および「死者の記憶と『非業さ』——白虎隊・佐

川官兵衛をめぐって——」(『政治経済史学』第490号、2007)を参照されたい。

- 2 赤澤史朗「戦後日本における戦没者の『慰霊』と追悼」(『立命館大学人文科学研究紀要』82号、2004)。
- 3 「世俗的世界にのみ関心を向ける」という、このような志向を日本の新宗教が見せることはしばしば指摘されるところであり、戦後の「新宗教ブーム」と言われるものはそのような戦後日本社会の側面を反映していると考えられる。さらに言えば、それと並行した伝統仏教——葬祭など死を扱う役回りを主として担う——の後景化現象は、死という問題の社会における位置づけを反映しているのかも知れない。
- 4 戦前の会津史談会の機関誌(『会津史談』『会津史談会報』『会津史談会誌』など、名称には変更がある)については、全冊を合本した復刻版が刊行されている(会津史談会編『会津史談(創刊号～第二十四号)』会津史談復刻刊行会、1977)。この復刻版の別冊索引(牧野登編)には、この間に掲載された「戊辰戦争関係」に分類される主要記事として50項目が立てられており、分類別の主要記事数としてもっとも多い。
- 5 『会津若松史7 大正・昭和の会津』(会津若松史、1967)第三章第一二節「観光都市づくり」304-305頁。なお、この節の執筆者は宮崎十三八である(宮崎については後述)。
- 6 宮崎十三八「私の人生の恩師——白馬に跨って逝った人——」(横山武追想録刊行委員会編『横山武さんを語る』歴史春秋社、1987)148-149頁。
- 7 『会津史談会誌』第33号(1957)65頁。
- 8 そのことがまた会津郷土史学の動向に影響を与えたとも言える。つまり、こうした会津観光の動向から、戊辰戦争への新たな関心が会津郷土史学の領域へフィードバックされたと考えられるのである。このようなフィードバックについては、宮崎十三八を例にとって後述する。
- 9 宮崎「私の人生の恩師」146頁。
- 10 『会津史談会誌』第33号65-66頁。
- 11 ちなみに、この曲が藤山一郎の歌でヒットしたのは1937(昭和12)年のことであった。
- 12 荒木義夫「横山さんと天守閣」(前掲『横山武さんを語る』所収)59頁、新城辰五郎「土は己を知る者のために死す」(同)90頁。
- 13 『会津若松史7』308頁。
- 14 会津史学会編『歴史春秋』第44号(1996)162頁。
- 15 財団法人としての認可は1917年のことである。
- 16 後述するが、この点に関しては上記経歴に「天守閣再建」が特筆されている事実も重要である。

- 17 宮崎「私の人生の恩師」147-148頁。
- 18 この点に関して筆者は、宮崎の旧制会津中時代の同級生であり、宮崎と同じく会津の郷土史家である畑敬之助から証言を得ている。少年時代の宮崎にも、会津の歴史への関心はさほど高がえなかったという。
- 19 宮崎十三八『私の城下町 会津若松』(国書刊行会、1985) 序文1頁(この本は序文のみ別のページ数が振られている。区別のため、序文の頁数についてはこのように書くこととする)。
- 20 宮崎『私の城下町』序文2頁。
- 21 同頁。
- 22 宮崎『私の城下町』序文2-3頁。
- 23 この綱淵の認識は、その時点で「〈痛み〉にこだわる会津郷土史」が別に存在していたことを示唆している。詳細は次章に譲るが、例えば早乙女貢『会津土魂』の連載が、1971(昭和46)年の開始以来、当時ですでに10年以上続いていたことなどに留意したい。
- 24 宮崎『私の城下町』3頁。
- 25 宮崎『私の城下町』323頁。
- 26 宮崎十三八『会津の史的な風景』(歴史春秋社、1993) 302頁。
- 27 この物言いがジョン＝アーリの「観光のまなざし」を踏まえたものであることは言うまでもない(ジョン＝アーリ[加太宏邦訳]『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局、1995、原著1990、参照)。なお、この「観光のまなざし」論を継承しつつ、概念の再検討と再構築とを批判的に図った研究として、遠藤英樹・堀野正人編著『「観光のまなざし」の転回——越境する観光学』(春風社、2004)も参照した。
- 28 宮崎十三八「会津人の書く戊辰戦争 ヒロシマのピカドンと同じ惨劇」(『会津人の書く戊辰戦争』恒文社、1993、所収) 61頁。
- 29 宮崎「会津人の書く戊辰戦争」63-64頁。
- 30 宮崎「会津人の書く戊辰戦争」68頁。
- 31 宮崎「会津人の書く戊辰戦争」72頁。
- 32 宮崎「会津人の書く戊辰戦争」72-73頁。
- 33 宮崎「会津人の書く戊辰戦争」77頁。
- 34 司馬遼太郎「会津人の維新の傷あと」(『歴史を紀行する』文春文庫、1978、所収) 46頁。
- 35 宮崎十三八「司馬さんと会津青年会議所」(『手作り会津史』歴史春秋社、1995、所収) 203-204頁。
- 36 早乙女貢『会津土魂』(全13巻、集英社文庫、1998—1999) 参照。これは、「昭和四十六年新年号から月刊『歴史読本』に連載が開始され、昭和六十年から六十三年にかけて新人物往来社から書籍として刊行されて、翌平成元年の第二十三回吉川英治文学賞を受賞した」(文庫版第一巻

解説) 作品であるが、長州藩に対するあからさまな敵意はこの長大な小説に一貫しているところである。

- 37 例えば、1955(昭和30)年から1969(昭和44)年まで、14年の長きにわたって会津若松市立会津図書館長を務め、読書会や自動車文庫の運営などに尽力した名物館長・大村武一は、萩生まれで旧制萩中学校を卒業した人物である。しかも、当時の村井八郎・会津若松市長に招聘されて会津図書館長に就任した大村の前職は、あろうことか山口県立萩図書館長であった。しかし、その当時はこのことが特に問題にされることはなかった。また、会津若松に赴任してまもなく挙行された戊辰戦役90年祭(1957)の時には、荒廃していた市内の西軍墓地の整備について大村が山口県庁に相談し、山口県の拠出によって改修がなされてもいた。この西軍墓地に関しては、90年祭において墓前祭がプログラムに組み込まれ、横山武・会津若松市長と小沢太郎・山口県知事もそこに列席している。

なお大村は、新図書館完成を見て1969(昭和44)年に退職した後も、郷里に戻ることなく、会津若松にとどまった。晩年は古典文学講座の講師などを務め、1980(昭和55)年、「単身この地で終焉を迎えた」という。

(以上、『会津若松市立会津図書館百年誌』会津若松市立会津図書館、2004、27-28頁および大村武一「西軍墓地の修復について」『会津史談会誌』第33号所収、77-79頁を参照した。)

- 38 この問いはおそらく、小松和彦の言う、死者に対する「後ろめたさ」に通じるものである(小松和彦『「たましい」という名の記憶装置』『神なき時代の民俗学』せりか書房、2002、所収、参照)。
- 39 宮崎十三八「戊辰戦争百二十年目の会津藩Ⅱ」(前掲『会津人の書く戊辰戦争』所収、111頁)。なお、この文章の初出時期は、本文でも触れたとおり1989年冬である。
- 40 この見解は、宮崎だけでなく、宮崎の「観光史学」のあり方を厳しく批判する牧野登にも共有されていた。例えば、戦後会津について牧野は次のように書いている。
今次大戦の結果、国家神道は否定され、靖国神社の権威もまた戦前期と大きく様変わりし、靖国に祀ること自体が今更の感があるが、それだけに祀るべき時に祀らずして今日にいたったことは会津人や東北人の心のこたわりとして残ることであろう。
(牧野登「会津人が書けなかった会津戦争」『会津人が書けなかった会津戦争』歴史春秋社、1997、所収、243頁)
- 41 宮崎十三八「戊辰戦争百二十年目の会津藩Ⅱ」

112頁。

- 42 宮崎や牧野らの指摘を受け継ぐ論説は、管見の限りでは畑敬之助『戊辰怨念の深層』（歴史春秋社、2002）の他、小林榮三「靖国神社と会津藩について」（『歴史春秋』第54号、2001）および佐藤一男「靖国神社に祀られない東軍の藩士たち」（『歴史春秋』第58号、2003）などごく少数の論考にとどまる。

ちなみに、佐藤論文には、次のようななかなか興味深い話がかかれていいる。すなわち、ある靖国神社奉賛会終身会員からの助言によると、「靖国神社側の考え方も柔軟に傾き、一方的に賊軍の汚名を着せられた方の合祀は可能の方向に」あり、その実現のためには「会津藩は賊軍でない」という地方議会や文化団体の決議が最も有効な方法である、というのである（135頁）。もっとも、そうした決議は地元たる会津若松で議論の対象にはなっていないようなので、今のところ実現の可能性は低いと思われる。

- 43 宮崎十三八「あとがき——佛都会津への散策の誘い」（『会津の古寺巡礼』恒文社、1996、所収）219-220頁。

- 44 宮崎よし子「あとがき 会津の里に真実一路の旅をゆく」（宮崎十三八『会津の観音巡礼』（恒文社、1996、所収）154頁。

- 45 この点に関しては特に、最晩年に執筆された『会津の古寺巡礼』を参照されたい。各所に戊辰の戦禍についての記述が見られるだけでなく、寺々の墓所を巡り、幕末維新期の人物の死に向かって思いを馳せるその筆の運びは、かつての「歴史散歩」との質の違いが明らかであり、印象深い。

- 46 例えば、早乙女貢は盛んに戊辰前後の会津藩士の生き様を描くが、そこで語られるのはつまるところ会津の「敗者の美学」と薩長藩閥政府の「裏切り」と「卑劣さ」の対比である。こうした美醜のファンタスティックな対比は、1987年に噴出したような怨念に名を借りた勝者への憎しみは掻き立てるかもしれない。だが、口を極めて薩長を罵倒し、会津人の「美しさ」を持ち上げたところで、会津の戊辰戦死者の非業と不条理が解消されるわけではない。

早乙女と宮崎とはこうした根本的なところで袂を分けている、と筆者は考える。

- 47 先に挙げた『会津の古寺巡礼』の「あとがき」の他、例えば、「明日の会津のために——青年よ、大志を抱け」（前掲『手作り会津史』所収）など参照。そこで宮崎は、次のようにより明確な反省の言葉を残している。

白虎隊観光も、ユニークなもので、敗戦を経験した日本人にはお涙ちょうだい式の物語もあって、一応はうけてきたが、もう若い人

たち、敗戦の苦労も理解できない人たちに訴えるには、力がなさすぎる。

反省すると、お座敷の白虎隊剣舞でお茶を濁してきたようなものだった。哲学がなかった。戦前の会津人は、戊辰戦争の殉難者の慰霊をすることによって、「会津藩は賊軍でなかった」ことを証明するのに努力してきた。戦後はそれが一応世に認められたので、白虎隊を通してする主張を失ったままで過ごしてきたようだ。広島では世界に向かって「ノウモア・ヒロシマ」を強く訴えている。それが核廃絶運動につながって世界平和運動を強力に進める発言をしている。会津にはそれが無い。（223-224頁）

- 48 『東京朝日新聞』昭和3（1928）年1月19日。

Tourist History in Postwar Aizu

TANAKA Satoru*

Abstract

The defeat of Japan in 1945 brought a serious identity crisis to Japanese people, especially the people of Aizu, who were at the height of their prosperity as the center of Japanese militarism in the early 1940s. This paper argues what the defeated people in postwar Aizu did to restore their identity. That is also the attempt to ask about the truth of “tourist history”, which became the basis of the postwar Aizu identity, and to explain the current situation of Aizu.

In postwar Japan victims of war tended to be forgotten completely. Yet, at the same time, the people still kept interest for the dead. It was the Boshin Civil War in 1868, rather than World War II that people remember in postwar Aizu. After 1945, Aizu-Wakamatsu City has developed as a tourist city based on the history of the Boshin Civil War and the Byakko-tai troops. Then they required the storyteller of “history”. MIYAZAKI Tomihachi (宮崎十三八, 1925—1996) can be regarded as the key person of the storytelling which was often called “tourist history”. Miyazaki told the “history” which contributed to the development of Aizu-Wakamatsu as a tourist city.

On the other hand, his “tourist history” has another aspect. He emphasized the tragic and unsolved death of Aizu people killed in the Boshin Civil War. He found another way to solve the bitterness in Buddhist culture and temples in the Aizu region.

Now all the war dead are being forgotten. The forgotten war dead causes the crisis of Aizu identity which needs memories of the war dead. This crisis is not only the case of postwar Aizu. This argument mentioned above can be applied to contemporary Japan and other nation states.

* Assistant Professor, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.